

近年の国語施策における「コミュニケーション」への言及について

「現代社会における敬意表現」

(平成12年12月8日 国語審議会答申・抜粋)

Ⅲ 言葉遣いの中の敬意表現

1 円滑なコミュニケーションと敬意表現

社会生活は人と人とのコミュニケーションによって成り立っている。コミュニケーションとは我々が伝えたい情報や、自分自身の考え、気持ちをお互いに伝え合うことである。コミュニケーションを円滑に行うこと、すなわち話し手が伝えたいことを摩擦を起こさずに確実に相手に伝えることによって、社会の中で自分を生かし、安定した社会生活を送ることが可能となる。そのためには言葉遣いの上で次のような工夫が必要である。

まず、伝えたい内容を正確にまた過不足なく伝えるための工夫がある。例えば、文の主語と述語の的確な対応、理由と結論などの論理的な対応、目的に応じた文章や談話の適切な組立てなどである。

次に、伝えたいことを平明で的確に表現するための工夫がある。例えば、一般になじみの薄い外来語や専門語などの難解な用語、あるいは整理されていない複雑な談話構成などは避けて、内容を理解しやすい平明な言葉遣いを的確に選ぶことである。

これらは、主として情報や考えを論理的に述べ、分かりやすく伝えるという面で円滑なコミュニケーションを支える言葉遣いの工夫である。

ここで取り上げる敬意表現は、以上のような工夫とともに、人間関係を円滑に保ちながら意思疎通を図る上で大切な言葉遣いの工夫である。すなわち、自分自身の考えを言葉で確実に伝えつつ、相手や場面への配慮を示す敬意表現を使うことによって、円滑なコミュニケーションが可能となる。我々は敬意表現によって、人間関係や社会生活をより円滑にすることができるのである。

2 敬意表現の概念

(1) 敬意表現とは

敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現からその時々によさわしいものを自己表現として選択するものである。

「相互尊重の精神」とは、一人一人の人間を大切にするという基盤に立って、相手の人格を互いに尊重する精神のことを言う。

「相手に配慮する」とは、相手の状況や相手との人間関係に配慮することである。話の内容によっては、話題に上る人に対しても配慮を及ぼすことになる。

「場面に配慮する」とは、会話が行われている場面や状況に配慮することを言う。「場面」には例えば、会議や式典といった改まった場面、職場や買い物などの日常生活の場面、親しい友人や家族とのくだけた場面などがある。そのほかに商談の場面、教育の場面、懇親の場面など様々な目的に応じて異なる場面がある。

「使い分けしている」とは、内容のほぼ同じ複数の表現の中から、その時々人間関係や場面によさわしいものを選択して使うということである。我々は、それぞれの社会ごとに期待されている言葉遣いの慣習を目安にしてよさわしい表現を選択している。

「自己表現」とは、自己の人格、立場、態度を言葉遣いで表すことを言う。様々な表現の選択肢の中からどれを選ぶかによって、話し手がどのような人間であるかということが、その人らしさとして表れるということである。

なお、上述の敬意表現は、話し手の側から述べたものであるが、聞く側においても同様のことが言える。聞き手は、相手の言うこと、言わないことを、立場や場面に配慮しながら理解することが必要であるが、それが敬意表現を支えるものとなる。このように、双方向で相手や場面に配慮した言葉遣いをしたり、理解したりすることによって円滑なコミュニケーションが成り立つことになる。

また、敬意表現は、話し言葉ばかりでなく書き言葉においても見られるものである。さらに、言葉以外の種々の側面、すなわち、表情、身振り、行動、服装などにまで広げて考えることもできるが、ここでは言葉、主に話す側から見た話し言葉に関係するものを扱うこととする。

敬意表現のような言葉遣いは、他の言語においてもそれぞれの社会の在り方に応じて存在する。

「国際化社会に対応する日本語の在り方」 (平成12年12月8日 国語審議会答申・抜粋)

II 日本語の国際化を進めるための方針

3 国際化に対応する日本人の言語能力の伸長

(2) これからの時代に求められる日本人の言語能力

(ア) コミュニケーションにかかわる言語能力の重要性

価値観や人間関係が多様化し、また情報が氾濫する現代の社会生活においては、主体性を持った個人として、物事を的確にとらえ、自分自身の考えを論理的にまとめ、相手に応じて適切に表現し、必要な場合には建設的に議論をして結論を得るといった、コミュニケーションにかかわる言語能力が欠かせない。そして、そのような言語能力を生きた力として働かせるには、相手を理解したり相手に働き掛けたりする意識や行動が不可欠である。

このような能力及び意識、行動は、異文化を背景とする人とのコミュニケーションを図るために必要な能力、意識、行動とも共通する。近年、大学生や社会人に、明晰な発話や明快な文章表現を行う力が付いていないという批判が聞かれるが、これらの力を十分に養うことなしには、国際化に対応する言語能力の伸長は望めない。

異文化を背景とする人とのコミュニケーションにおいては特に、①自己の考えを十分に言語化すること、②平明・的確かつ論理的に伝達すること、③相手の文化的背景を考えて表現や理解を柔軟に行うこと、の3点に留意すべきである。一口に「異文化」と言っても、それぞれの文化におけるものの考え方や、発話や行動の様式は多様であることから、すべてを相手に合わせようとするのではなく、相互に相手を理解しようと努め、相手の考えや気持ちを理解するための質問や自分自身を分かってもらうための説明の言葉などを適切に織り込みつつ、誤解が生じないように、やりとりを進めていく態度を持つことが基本となろう。

一方で、互いに察し合って会話を進めていく日本人の伝統的なコミュニケーションの在り方は一つの文化であり、それを共有している人の間では効率的で充足度が高く、心地よさや安らぎを生み、互いの心を結び付ける働きも強いものである。これからの日本人は、適切に言葉を用いて表現や理解を柔軟に行う能力を高めることと並んで、身近な人間関係などに生きる伝統的なコミュニケーションの在り方を自覚的にとらえるようにすることも大切である。異なる文化を持つ人に対しては、このようなコミュニケーションの在り方によって成り立っている日本人の人間関係について、説明する姿勢を持つことも必要である。

「これからの時代に求められる国語力について」 (平成16年2月3日 文化審議会答申・抜粋)

I これからの時代に求められる国語力について

第1 国語の果たす役割と国語の重要性

1 個人にとっての国語

③ コミュニケーション能力の基盤を成す

言葉や文字によって、意思や感情などを伝え合いコミュニケーションを成立させることは、国語の最も根本的な役割である。その意味で、国語は個人が社会の中で生きていく上に關書くことのできない役割を担っている。

コミュニケーションの基本は、相手の人格や考え方を尊重する態度と言葉による伝え合いであり、国語の運用能力がその根幹となっている。また、言葉によって多様な人間関係を構築することのできる「人間関係形成能力」や目的と場に応じて「効果的に発表・提示する能力」は、現在の社会生活の中で強く求められている能力の一つであるが、これらの根幹にあるのもコミュニケーション能力であり、国語の力である。

2 社会全体にとっての国語

② 社会生活の基本であるコミュニケーションは国語によって成立する

社会生活は、人間と人間との関係によって成立しているが、その人間関係を成立させるのがコミュニケーションの手段として用いられる国語である。コミュニケーションを成り立たせている「聞く・話す・読む・書く」のすべてが国語を通して行われ、これらの活動を介して社会生活が成立している、すなわち、国語なくしては、社会は成立せず、その発展も望めない。

さらに、各人が自分らしい、納得できる幸せな人生を全うできるようにするためには、自分の頭で考える力と、他の人との関係を考慮しつつ、自分の中にある思いを言語化して社会に発言していく力が必要である。

3 社会変化への対応と国語

① 価値観の多様化、都市化、少子高齢化などの進展と国語

いじめや不登校、家庭内暴力、少年非行などの子供をめぐる諸問題についても、子供同士、子供と教員、子供と親、子供と大人などの間で言葉を介しての意思疎通や、日常的なコミュニケーションが十分にできなくなっていることが、一つの原因ではないかと指摘する声もある。これらの諸問題への対応の面からも、言葉を用いて伝え合う能力の育成は子供たちの教育における喫緊の課題であると考えられる。

具体的には、相手や場に応じた言葉遣い、あいさつや依頼・感謝の言葉、お互いを認め合い励まし合う言葉など、社会生活と人間関係形成に不可欠な話し言葉の運用能力の育成に取り組むことが重要である。

第2 これからの時代に求められる国語力

1 国語力の向上を目指す理由

例えば、都市化、国際化により増加した見知らぬ人や外国人との意思疎通、少子高齢化によって変化しつつある異なる世代との意思疎通、近年急速に増加した情報機器を介しての間接的な意思疎通などにおいて、多様で円滑なコミュニケーションを実現するためには、これまで以上の国語力が求められることは明らかである。また、少子高齢化や核家族化に伴って家庭や家族の在り方が変容し、従来、家庭や家族が有していた子供たちへの言語教育力が低下していると言われていたことも大きな問題である。

II これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について

第1 国語力を身に付けるための国語教育の在り方

1 国語教育についての基本的な認識

<言葉への信頼を育てることが大切>

国語教育の在り方を考える場合の根本的な問題として、日本人の多くが言葉の力を信じていないという指摘がある。言葉によって物事が変わり、また、変えていくことができるという言葉への信頼を学校教育の中だけでなく、社会全体で教えていくことが大切である。このような言葉に対する

信頼がないと、国語教育そのものが成立しにくくなるだけでなく、日本の社会そのものが危うくなるおそれもある。

言葉への信頼については、コミュニケーションを通して形成されていく面もあり、家庭や学校などで十分なコミュニケーションが行われることが望ましい。特に、学校教育においては、人間関係形成の能力としての「話す」「聞く」「話し合う」の力を確実に育成することが求められる。

＜発達段階に応じた国語教育を＞

その上で、国語力の効果的・効率的な向上を目指すためには、一人の人間がどのように発達していくのかという観点から、各発達段階でどのような国語教育を行うべきかを考えていく必要がある。学校段階に余りこだわることなく、子供の発達段階を踏まえて、情緒力や論理的思考力などを育てていくためには、どのような国語教育が必要なのかを具体的に考えていくことが求められる。

その際に、国語の運用能力にかかわる部分は、基本的に双方向の交流としてのコミュニケーションを通じてしか育たないという視点も大切である。また、コミュニケーション能力は社会生活を送っていく上で欠かせないものであるだけでなく、最近の脳科学の研究成果によれば、コミュニケーションを行う際に活性化する脳の場所は国語力とかかわる部分でもあることが判明している。このことから、コミュニケーション能力を鍛えることで、国語力を支える脳の部分も鍛えられることになると考えられる。

「敬語の指針」

(平成19年2月2日 文化審議会答申・抜粋)

はじめに

＜検討の経緯＞

本答申は、平成12年の「現代社会における敬意表現」(答申)で示された考え方を基本的に受け継ぐものである。敬意表現について、同答申では、次のように定義・説明している。

敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである。

本答申では、敬語に関し、「相互尊重」や「自己表現」という用語と考え方によって説明したり、「相手や場面に配慮して」という趣旨の説明を用いたりしている。このことに端的に現れており、本答申は、敬語を用いた言語表現を敬意表現に位置付ける立場に立っている。

第1 基本的な認識

1 敬語の重要性

敬語は、話し手が、相手や周囲の人と自らの間の人間関係をどのようにとらえているかを表現する働きも持つ。

留意しなければならないのは、敬語を用いれば、話し手が意図するか否かにかかわらず、その敬語の表現する人間関係が表現されることになり、逆に、敬語を用いなければ、用いたときとは異なる人間関係が表現されることになるということである。敬語をどのように用いるとどのような人間関係が表現されるかについて留意することはもとより必要であるが、それと同時に、敬語を用いない場合にはどのような人間関係が表現されるかについても十分に留意することが必要である。

言語コミュニケーションは、話し言葉であれ書き言葉であれ、いつも具体的な場で人と人との間で行われる。そして敬語は人と人との間の関係を表現するものである。注意深く言えば、意図するか否かにかかわらず表現してしまうものである。そうであるからには、社会生活や人間関係の多様化が深まる日本語社会において、人と人が言語コミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために、現在も、また将来にわたっても敬語の重要性は変わらないと認識することが

必要である。

「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」

（平成25年2月18日 文化審

議会国語分科会報告・抜粋）

4 コミュニケーションの在り方について

〔基本的な方向性〕

今後、求められるコミュニケーションの在り方に関する指針の作成について検討していく必要がある。検討に当たっては、この課題が個々人の言語生活と密接に関わるものであることを踏まえて、改めて国民の意識調査を実施するなど、慎重に対応する必要がある。

(1) 情報化・国際化の中でのコミュニケーションについて

情報化に伴って、パソコンや携帯電話などの情報機器の使用が一般化した関係で、非対面コミュニケーションの機会が増えて、対面コミュニケーションを苦手とする人が増えているのではないかという指摘がある。平成23年度の文化庁「国語に関する世論調査（平成24年2月調査）」でも、初めて会った人と話をすることについて、「苦手である（「苦手である」と「どちらかと言えば苦手である」を合わせた数）」と答えた人が55.5%と、「得意である（「得意である」と「どちらかと言えば得意である」を合わせた数）」と答えた人の42.9%を上回っている。情報機器の使用は、今後、更に一般化していくことが予想され、上記の調査結果についても数値が大きく動いていく可能性もある。その意味で、この調査項目については経年調査によって、今後の動向を注視していく必要がある。情報機器の使用が更に一般化していくことになると考えられる社会状況の中で、対面コミュニケーション能力をどのように捉え、身に付けていくのかは大きな問題である。

また、国際化との関係では、既に国内に207万人（平成23年12月現在。法務省調べ。）を超える外国人が生活しているという実態があり、外国人とのコミュニケーションが今後より切実な問題となってくる可能性がある。

(2) コミュニケーション能力の二つの重要な側面について

日本経済団体連合会が平成24年7月に調査結果を発表した「新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート」によれば、企業が選考に当たって重視した点を24項目から五つ回答する設問では「コミュニケーション能力」が9年連続で第1位となっている。また、経済同友会が平成24年11月に調査結果を発表した「企業の採用と教育に関するアンケート調査」でも、「チームワーク力（コミュニケーション能力、協調性等）」が重視されている、という結果が出ている。

このように社会の各分野でコミュニケーション能力が重要であるとされていることがうかがえるが、コミュニケーション能力をどのように捉えるのかについては様々な考え方があり、必ずしも明確に整理されているわけではない。

今後、求められるコミュニケーション能力としては、二つの側面が重要な要素として挙げられることが多い。一つは、対面コミュニケーションの場面において、人間関係を作り上げながらコミュニケーションを取れる、言わば人間関係形成能力とも言い得る側面である。もう一つは、自分の考えや意見などを整理し、根拠や理由を明確にして説得力を持って論理的に伝えることのできる側面である。

(3) コミュニケーションの在り方に関する指針の作成について

以上のことから、コミュニケーション能力の二つの側面を踏まえて、現在及び今後の社会生活において必要とされているコミュニケーション能力とは、具体的にはどのような能力であるのか、どのようにすれば身に付けることができるのかに関する指針の作成について検討していく必要がある

る。

検討に当たっては、コミュニケーションが個々人の言語生活と密接に関わるものであることを踏まえて、改めて国民の意識調査を実施するなど、慎重に対応する必要がある。その上で、次の点に留意すべきである。

- ① 「コミュニケーション」及び「コミュニケーション能力」は、それぞれの分野や立場によって、多様な考え方や捉え方がなされている中、分科会で検討していく場合には、「言葉」を中心とした範囲に限定していくことが基本となるため、まずその範囲を具体的に明確にする必要がある。
- ② コミュニケーション能力の育成は学校教育との関わりが大きいため、学校教育との関係についても十分配慮する必要がある。